

平成28年度受賞パンフレット



“往来”と“all right”

—都市と農山漁村の共生・対流表彰事業—

第14回 オーライ!ニッポン大賞



「オーライ!ニッポン」とは

都市と農山漁村の間の“人・もの・情報”の往来（おうらい）を盛んにすることで、日本全国が元気（All right）になることをめざす国民運動「都市と農山漁村の共生・対流」のキャンペーンネームです。

第14回 オーライ! ニッポン大賞 講評

都市と農山漁村の共生・対流（以下「共生・対流」という。）に関する優れた取り組みを表彰するオーライ!ニッポン大賞は、第14回を迎えることができました。これもひとえに現場で活動を実践されている皆様のご尽力と、関係7省をはじめ関連団体及び地方自治体等の関係者の皆様の温かいご理解とご支援の賜物であり、この場をお借りして心より敬意と感謝を申し上げます。

政府におかれましては、魅力あふれる地方を創出し、地方への人の流れを創り出す「まち・ひと・しごとの創生」に取り組んでおられます。「共生・対流」とは、都市と農山漁村を相互に行き交うライフスタイルを広め、都市と農山漁村の双方が元気を取り戻すことをめざす国民運動であり、その役割はますます重要になるものと存じます。

さて、今年度は全国からオーライ!ニッポン大賞84件、ライフスタイル賞5件、合計89件のご応募を頂きました。募集の周知にご協力いただいた関係者の皆様に改めて御礼申し上げます。

今年度のオーライ!ニッポン大賞は、都市と農山漁村の共生・対流の手法の広がりを実感する応募内容でした。農山漁村のコミュニティの資源を上手に活用して、教育旅行や人材育成に活用する取り組みから、大都市から若者等が農山漁村へ出向いて地域の人と一緒に課題解決に取り組むスタディツアー、中山間地域に伝わる暮らしや古民家を都市生活者と一緒に再生する取り組み、棚田保全を通じて農業や自然への関心をたかめ地元住民と参加者が協働し、より多くの都市生活者や企業と連携するなど、企画力と実行力を活かして、課題克服にエネルギーに取り組んでいる様子がうかがわれました。

ライフスタイル賞は、都市部からの移住（U J I ターン）や都市と農山漁村を行き来する二地域居住等を通じて個性的で魅力的なライフスタイルを実践しながら共生・対流に貢献している個人を表彰するものです。

今年度は、地域おこし協力隊として農山漁村地域に入った若者が、地域の担い手として活動する取り組みや、自身の経験を活かして第2の人生を農山漁村地域と都市と二地域居住しつつ自然ガイドの育成や農林水産業の販路拡大に精力的に取り組む姿が印象的でした。

また、男女問わず、働き盛りの人々が農山漁村を舞台に様々な活動を展開している、そのバイタリティーを力強く感じました。

こうした人々のライフスタイルは、都市生活者の都市と農山漁村のオーライ(往来)として、田舎暮らしのモデルとして、参考となるものと思います。

審査委員会における選考の結果、オーライ!ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）1件、オーライ!ニッポン大賞3件、審査委員長賞4件、ライフスタイル賞3件の計11件を選定いたしました。

グランプリに輝いた「特定非営利活動法人トチギ環境未来基地」（栃木県益子町）は、人手不足で荒廃が進む中山間地域の里山や森林を若者の力で再生するために、若者たちが3か月の長期間共同生活をしながら森づくりを行い、地元の人たちとの協力・交流をすることで人間的にも成長するという人材育成プログラムを開発。7年間で1万3千人のボランティア参加者を育てるなど高く評価され、今後の全国の里山保全にも参考となる取り組みとして大いに期待されます。

その他の受賞者の皆様に対するコメントは、受賞内容をご紹介する各ページに記載させていただきましたのでご覧ください。

惜しくも受賞を逃された皆様の中にも魅力的な取組が数多くございました。今後、さらに実績を積み重ねて次回以降に再度ご応募いただきますよう、心からお待ちいたしております。

最後に受賞者の皆様をはじめ、すべての応募者の皆様にこれまでの共生・対流に対するご尽力に感謝申し上げますとともに益々のご活躍とご発展を祈念いたしまして講評に代えさせていただきます。

平成29年3月3日

オーライ!ニッポン大賞 審査委員会
会長 安田 喜憲



第14回オーライ!ニッポン大賞 受賞者一覧

オーライ!ニッポン大賞グランプリ

- 1 栃木県 益子町
特定非営利活動法人 トチギ環境未来基地

オーライ!ニッポン大賞

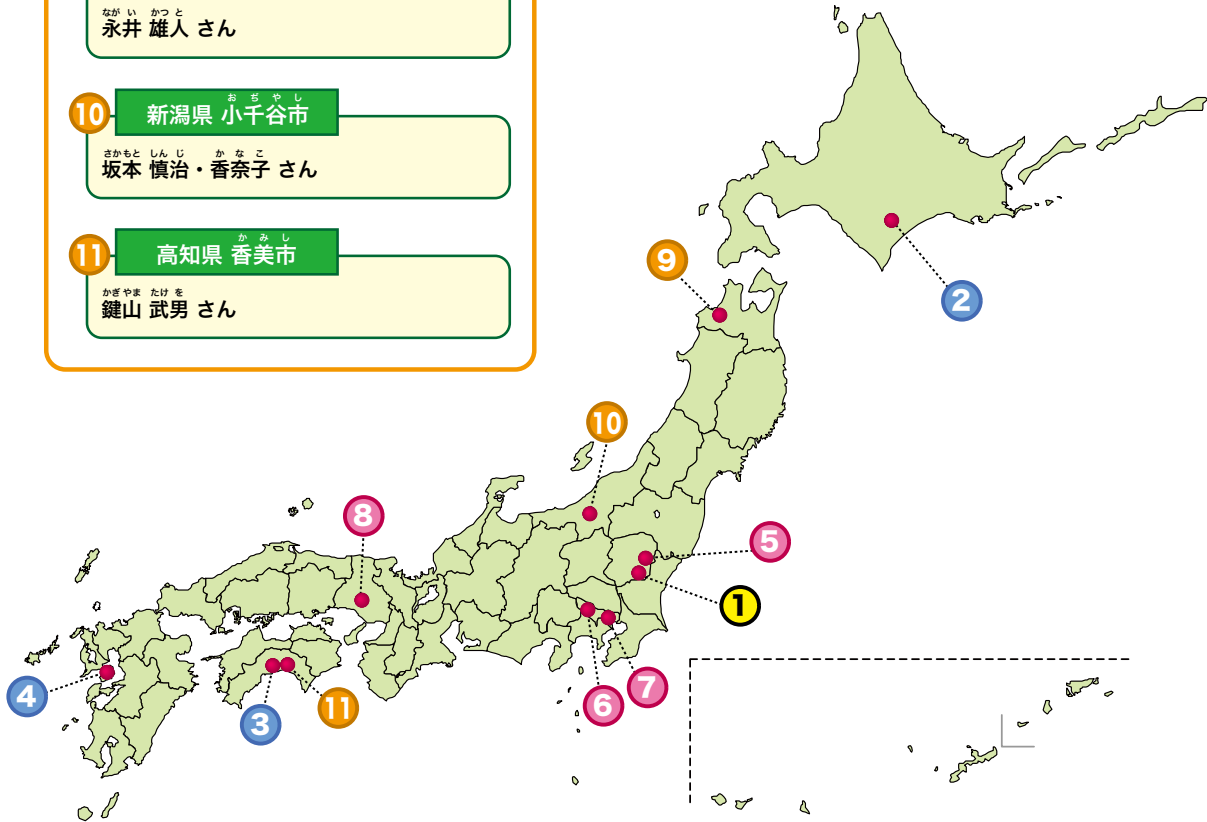
- 2 北海道 更別村
国際トラクターBAMBA実行委員会
- 3 高知県 高知市
特定非営利活動法人 土佐山アカデミー
- 4 長崎県 南島原市
一般社団法人 南島原ひまわり観光協会

オーライ!ニッポン大賞審査委員長賞

- 5 栃木県 大田原市
大田原グリーン・ツーリズム推進協議会
株式会社 大田原ツーリズム
- 6 東京都 檜原村
一般社団法人 湯久保宿
- 7 東京都 文京区
株式会社 Ridilover
- 8 兵庫県 市川町
特定非営利活動法人 棚田 LOVER's

オーライ!ニッポン ライフスタイル賞

- 9 青森県 鯉ヶ沢町
永井 雄人 さん
- 10 新潟県 小千谷市
坂本 慎治・香奈子 さん
- 11 高知県 香美市
鍵山 武男 さん



オーライ! ニッポン大賞グランプリ

特定非営利活動法人 トチギ環境未来基地 (栃木県益子町)

内閣総理大臣賞

学生・若者カテゴリー部門



■受賞の内容

トチギ環境未来基地は、栃木県芳賀郡益子町を拠点に活動する若者主体の森づくりNPOである。若者の力で森づくりや里山の整備を進めることと、その実践活動を通じて次の時代を担う若者を育むことを団体の使命の両輪とし、栃木県の芳賀郡及び宇都宮郊外を中心に8つの里山フィールドで活動している。

人手不足で荒廃が進む中山間地域の里山や森林を若者の力で再生するなど、実践活動を通じて次の世代を担う若者を育むことを使命として実施。「若者のチームによる長期間滞在型の森づくり活動プログラム」では4～6名の若者たちが共同生活をしながら近隣の森へ赴き、中山間地域での森づくり活動や地元の人たちとの協力・交流を通じて新たな発見や気づきを得て成長することを目指している。平成21年から取組を開始し、7年間で1万3千人を超えるボランティアと活動を行った。

代表の塚本氏は、2つの思いをもってNPOを立ち上げた。

1. 荒廃の一途をたどる日本の森林を市場経済の力だけでなく、市民の力で保全していく方法はないか。2. 日本の若者の力を引き出し、行動力ある人材を育て、地方の過疎化や高齢化の問題解決ができないか。そんな時にアメリカのConservation Corps (コンサベーション＝保全・コア＝隊) という若者が1年間チームを組んで環境保全活動に取



■受賞者の概要

活動年数：8年

活動日数：年間256日 (平成27年)

活動エリア：栃木県益子町、茂木町、市貝町、宇都宮市

活動を担う人数：6人 (うち専属スタッフ2人)

参加者数：3,637人 (平成27年) 累計13,576人

■写真の説明

- ・(写真上)様々な世代の人たちと一緒に里山保全に汗を流す
- ・(写真左下)作業技術研修。現場での実践を通じ若者の力の向上を。
- ・(写真右下)整備した森林を、子ども達の自然体験の場として活用

り組むプログラムに出会い、平成11年に参加。帰国後、日本の風土にあったプログラムを立ち上げたのがトチギ環境未来基地である。

若者のチームによる長期間滞在型 (3ヶ月間) の環境保全プログラムでは、荒れた里山や森林、竹林の整備を行うために、人手不足の中山間地域で汗を流して活動できる若者たちがいつもいるという仕組みの構築を図っている。また、長期間活動する若者たちが中心となり都市部企業、ボランティア、若者自立支援団体の若者など多様な人たちの里山保全活動の機会も作っている。

この長期間滞在型では、平成21年第1回開催以降、3か月間のプログラムは15回、合計45か月実施し、これまで61人の若者が参加した。

この結果、6人が栃木県に移住した。また、21人がNPOに就職して、林業や若者支援、環境の仕事に携わるなど、3か月間のプログラムを通して学んだことは、各人の生き方や価値観に大きな影響を与えている。

市貝町では、廃校になった小学校の裏にある学校の森を再生し、子どもが安全に楽しく遊べる学童保育の森としても活用されている。

平成28年度は、年間述べ2,025人 (栃木県内での活動) が参加した。



3か月という比較的長い期間、かつ若者の参加を念頭において森林保全活動に関する専門性の高い作業のプログラムや日帰り、週単位と選びやすいプログラムを準備。森林・里山は全国にあり、中山間地域の農山村で若者が定住して活躍できる可能性が高い。長期間滞在型活動に累計61名の若者が参加した実績は大きく、人手不足で荒廃が進む中山間地域の里山や森林を若者の力で再生するモデルとなり得ると高く評価された。

オーライ! ニッポン大賞

国際トラクターBAMB A実行委員会 (北海道さらべつむら更別村)



■受賞の内容

冷涼で寒暖の差が大きく、農業に最適な気候を活かして、畑作では馬鈴薯、甜菜、小麦、豆類などを中心に寒冷地に強い作物が生産される他、酪農も盛んで、豊かな大地を活かした農業経営は一戸当りの耕作面積は約50ha、トラクター所有台数平均5台、ともに国内有数の大型機械化農業が行われている。

農業を基幹産業として発展してきた更別村も過疎化が課題となっており、何とかして地域活性化の起爆剤を見出すため、平成14年度に更別村商工会が北海道の補助事業「地域資源調査事業」を活用し、検討委員会を組織して「更別の資源は何か」を検討した。

この結果、「大規模農業」、「肥沃な大地」、「労働と活力・トラクター社会」などをキーワードとして、更別農業に関わる地域資源がこの村にあることを改めて発見した。委員（農家の青年）から、北海道弁で「馬でパンパやっているのだから、トラクターでレースやったら面白いんでないかい!」、「お～、やるべ」と意見が出た。そこで地域活性化の起爆剤として、トラクターを「ばんえい競馬」に見立てた「BAMB A競技」が誕生した。平成15年から実施している日本列島どこを探しても見当たらない農業用トラクターを使ったユニークな当該イベントには、人口約3,300人の村に観客2万人近くが参加するまでに成長、現在では知名度が飛躍的に向上し、関東や中京



■受賞者の概要

活動年数：14年
活動日数：年間180日
活動を担う人数：実行委員200人（うち役員、事務局37人）
年間参加者：1万5800人（2016年・第14回開催観客数）

■写真の説明

- ・(写真上)出場メカ馬44台が商店街パレード。総額は5億円とも…
- ・(写真左下)メカ馬3台でスラロームを走破、白熱の熱いレース
- ・(写真右下)会場内ではメカ馬試乗など、都市にはない感動体験

圏、遠くは四国・九州からの訪問もあり、まさに農漁村の活気と自信を届けている。

運営する実行委員会は、村内の10代から70代までさまざまな職業の人が参加し役職にとらわれずお互いの意見を尊重し、活発な議論を展開している。毎年7月第二日曜日に開催するイベントに1月から半年をかけて開催に備えている。実行委員会には、大人だけでなく地元の更別農業高校の生徒も加わるなど、村が一丸となって実施している。このイベントにより「食の大切さ」、「農業の素晴らしさ」を北海道・十勝から発信し続ける一方、実行委員会及びイベントの活動経費は行政の補助金に依存（占める割合は低い）することなく、実行委員が自らの足で稼いだ協賛金、販売収入等をもって賄っている。平成28年14回大会では、これまでになかった農業女子（目指す方含む）にターゲットを向けたメカ馬レース「メカジョ・スズランカップ」を企画、新たな取組みを始め、農業女性や大学生も参加し、内閣府の女性活躍推進担当も関心を寄せ、日本を代表する化粧品メーカーも本イベントに支援の手を上げた。食糧自給率＝北海道200%、十勝1,100%、更別村は6,400%。まさに農業用トラクターを介したイベントを通じて食の大切さ、農業の素晴らしさ、そして「十勝・更別村の農業は元気」というメッセージを発信し続ける実行委員の姿勢、地域の底力は強い。



北海道の大規模農業の象徴であるトラクターを馬に見立て新しいスポーツイベントに仕立てて3,300人の村に2万人が集まる点に新規性・独自性がある。独特なコンテンツを開拓することは地域活性化にとって重要であると活動は高く評価された。

オーライ! ニッポン大賞

特定非営利活動法人 と さ やま 土佐山アカデミー

(高知県高知市)



■受賞者の概要

活動年数：5年
活動日数：年間330日
活動を担う人数：16人（うち専属スタッフ3人）
年間参加者：約1,000人 累計9,800人
売上実績：約3,000万円／年 累計 約13,000万円

■写真の説明

- ・(写真上) 竹林拡大を啓発する門松づくりワークショップ「竹取物語」
- ・(写真左下) 間伐を体験しモノづくりへつなげる「5万円で作る」
- ・(写真右下) 地域の景観田の整備を体験する、アカデミー

■受賞の内容

高知市にある土佐山は、JR高知駅から車で20分のところにある自然豊かな里山。明治の自由民権運動時代から続く「夜学会」等、地域全体での社会教育が根付いている。旧土佐山村時代に設立された夢産地とさやま開発公社は20年以上前から有機農業に取り組んでいた。平成23年7月1日(財)夢産地とさやま開発公社内で土佐山アカデミー事業を立ち上げ、7月15日高知市ふるさと雇用企画提案型雇用創出事業で職員3名を雇用。さらに、平成24年10月1日地域内外から多様な人々が集う「学びの場」を目指し、地域の課題を資源と捉え、循環型のシンプルで丁寧な生きかたを知るきっかけを提供する事によって、より豊かな社会づくりを目指す人材の育成を支援することを目的とした特定非営利活動法人として活動を開始した。

土佐山アカデミーは、4つの事業を展開し、年間を通して定期的に開催している短期・長期ワークショップや研修には延べ9,800人以上が受講している。

「TOSAYAMA ACADEMYプログラム群」(循環型の生活を地域の方から学ぶ)は、活動の軸と言える。平成23年に始まる3ヶ月プログラムは、18歳～60歳まで総勢27名の参加者を土佐山に受け入れ、日々地域の方々との交流を図ってきた。参加者は、地域内の空き家を活用したシェアハウスに暮らし、日常的に開催される地域の行事等に参加。地域住民と参加者が活発に意見を交換し、親睦を深めている。

移住前提者や中山間地域ビジネス立ち上げを見据えた二地域居住想定者など、多様で個性豊かな人材が集まっている。土佐山ワークステイ(中長期滞在支援サービス)は、平成25年から実施。都会の方が土佐山に滞在し「家を貸し、車を

貸し、コネを提供する」という、土佐山のための仕事をすすめる方へのプログラム。これまでに8名以上が利用し、3ヶ月滞在型プログラムが終わる頃には地域の方に顔を覚えられ、いつのまにか地域に溶け込み、終了後は、もっと土佐山に住み続けたいという人たちが現れている。

EDGE CAMP(中山間地域特化型起業家養成プログラム)は平成27年から実施。「雇用がないだけで、仕事はある」、地域での仕事の作り方を6ヶ月間かけて仲間と共に学んでいくものであり、日本財団より補助を得て実施している。定員8名に対し、平成26年は8倍、平成27年も4倍の審査をくぐり抜けた合計21名(平成26年13名、平成27年8名)が、土佐山の地域資源を使ったさまざまなプロジェクトを実践している。その結果、平成26年は4名が土佐山に移住して、空き家に暮らし、現在、空き家件数は「0」となり、土佐山への移住希望者2名が順番待ちをしている。

TOSAYAMA Creative Camp(企業・団体研修)は、平成27年から実施。地域の課題を研修教材へと編集し、地域おこし協力隊の研修のみならず、高知県庁、大手企業本社等からの人材育成研修を行っている。

地元からも「土佐山アカデミーが連れてくる人はえい人ばかりや、絶対につぶしたらいかん」「たくさん人を連れて来てくれゆう。私らもちょっと自信が出てきたぞね」と言われ、地域の誇りの再生にも寄与できている。



「土佐山ワークステイ」は、2013年から始めた中長期滞在支援サービス。3ヶ月滞在型プログラムで住居も仕事も生み出していく。「EDGE CAMP」(日本財団補助)には定員8名に毎年数倍の応募があり2014年4名、2015年6名が移住。アカデミー全体として24名が移住し、現在、空き家は0、希望者2名待ち。活動年数は短いが高知の課題を「学びの交流人口」に転換させる戦略は高度なオリジナリティがあり、スタッフの優秀さが光ると高く評価された。

オーライ! ニッポン大賞

一般社団法人 みなみしまばら 南島原ひまわり観光協会 (長崎県南島原市 みなみしまばらし)



■受賞者の概要

活動年数：8年
活動日数：年間365日
活動を担う人数：10人（うち専属スタッフ5人）
年間参加者：教育旅行 12,388人 累計34,690人

■写真の説明

- ・(写真上)『農業体験の様子・野菜の定植』
- ・(写真左下)『団らの様子(台湾民泊ツアー)』
- ・(写真右下)『餅つき体験(韓国大学生)』

■受賞の内容

南島原市は平成18年3月に旧8町が合併。その後、交流人口を増やして地域に経済効果をもたらすことを目的として平成20年10月に観光協会を設立した。

以来、一次産業が盛んに行われている地域の魅力を生かしたグリーン・ツーリズム事業を推進し、農林漁業体験民宿を増やして都市部からの修学旅行生の誘致に取り組んだ。平成21年に県のグリーン・ツーリズム推進地域に認定され、同年に農林漁業体験民泊の営業を開始（6軒）。平成23年9月には修学旅行の受け入れを開始した。その結果、平成27年度には年間1万人を超える実績を上げた。春は関西地方の中学生、秋は関東地方の高校生がやってくる。当地の農家民泊では、宿泊する家庭の家業体験を行うことをルールとし、滞在中は家族の一員となり、家ごとに異なる体験をして過ごす。土や生きた魚に触れ、これまで体験したことのない思い出を作る。家庭の温かみを感じ、滞在時間に比例して大きくなる感動により、別れには涙を流して帰っていく姿が見られる。

専業農家が多く、農家民泊受入家庭代表者の平均年齢は60.9歳、20代から80代と幅広い。四世代同居の大家族もあり、後継者がいる家庭が多いことから、将来的にも継続性・発展性が可能である。

また、海外からのお客様も多い。特に台湾からのツアーは、「日本旅行リピーターのお客様が日本の田舎暮らしを

体験する」をテーマに当地の農家民泊を利用され、台湾で多くの賞を受賞するなど平成27年度年間約1,000人の利用があった。海外のお客様も家族の一員となってもらい、海外の場合は言葉の壁を越えた心の交流が人気を博している。この地域の人柄は田舎特有の閉鎖的な部分もあるが、一旦懐に入ると、とことん親身になって対応する人の温かさが特徴であり、人との触れ合い、交流を大切にする農家民泊と相性が良い。

地域への経済波及効果は、総務省の平成23年の産業連関表で換算すると平成27年度実績で2億円を超えている。農家民泊によって直接的に農林漁家だけが潤うのではなく、その他の観光産業や近隣のスーパーやガソリンスタンドなどにも潤いをもたらしている。このことからこの短期間で“南島原ひまわり村”が地域において大きなコミュニティに成長したと言える。

ひまわり村の中での研修会は、受入家庭のお母さんを中心に料理教室を実施し、そのメニューのレシピ集を作成して全ての受入家庭に配布し、情報を共有している。その他、受入家庭の中には地域の魅力を発信しようと、加工品の販売を行うようになった受入家庭も出てきた。苺農家が自家製のいちごソースを使ったかき氷屋を始めたり、物販イベントに出店して野菜やお餅、漬物などを販売するなど農家民泊以外にも積極的な活動への波及効果も出ている。



原城跡等の歴史遺産やイルカウォッチングの地域資源を活かし、農家民泊を成長産業と位置付けている。年間売上げ1億800万円、年間参加者12,388名の実績を上げた協会の中間支援機関としての役割。そして、民泊受入家庭代表者の平均年齢は61歳ではあるが、4世代同居の家族もあり後継者が居る家庭が多いことから持続性、効果性なども大いに期待できる。

オーライ! ニッポン大賞 審査委員会長賞

おおたわら

大田原グリーン・ツーリズム推進協議会・株式会社大田原ツーリズム (栃木県大田原市) おおたわらし

農山漁村イキキ実践部門



■受賞の内容

平成23年に東日本大震災及び放射能の風評被害により、一気に農業の衰退と地域の危機が差し迫った。そのような現状を打開するため、グリーン・ツーリズムの推進による地域活性化と農業発展を掲げ、本事業が始まった。

平成24年度にグリーン・ツーリズム事業の一環として、市内の地域資源の再発見と商品化及び地域と都市部の橋渡しの窓口とするため、大田原市と事業者が出資し、(株)大田原ツーリズムを設立。第二種旅行業を取得して都会から人を呼ぶための旅行会社とした。また、大田原市、農業団体、観光協会、民間団体を合わせた22団体を構成員とし、大田原市グリーン・ツーリズム推進協議会を立ち上げ、体験指導方法や食物アレルギー対策の研修、農家民泊先進地の視察を行うことで、地域の人づくりの組織として活動をはじめた。現在では地域のお母さんが中心となる「食事部会」など活動の幅も広がっている。

平成24年度のグリーン・ツーリズムによる観光交流人口は189人。それから、グリーン・ツーリズムの取り組みが徐々に地に浸透していき、平成25年度806人、平成26年度3,923人、平成27年度6,419人、平成28年度見通し約8,000人と、毎年右肩上がり交流人口が増加している。

農家民泊は、5年前の0軒が平成28年10月現在では、許可手続き申請中も含めて大田原と那珂川町で合計約120軒と



■受賞者の概要

活動年数：5年

活動日数：通年

活動を担う人数：大田原ツーリズム7人、
農家民泊120軒、スタッフ6人

参加者数：年間6,419人 累計11,337人

■写真の説明

- ・(写真上) 田植え体験
- ・(写真左下) 耕作放棄地開墾体験
- ・(写真右下) 神社の清掃活動体験

なった。法律遵守やリスクマネジメントの意識を高めるため、協力農家は全て特例簡易宿舎の許可を取得している。

外国人の受け入れは全体の約3割。台湾を中心にアジア諸国、アメリカからも来客している。海外からの教育旅行では、例えば、台湾からは平成26年度1校、平成27年度6校、平成28年度10校と増加。

また、企業向けの「小学校の生活体験」「企業の運動会」など、企業内のコミュニケーションの育成のためのプログラムを企画して辺地にある廃校に人を呼び込んだり、学校の教育旅行に耕作放棄地問題をプログラムに取り入れた「耕作放棄地開墾体験」を実施し、『地域課題×都会の子供の育成』という相互に意識した体験プログラムの提供を行うなど、社会課題をあえて体験の提供の場とする逆転の発想で人を呼び込んでいる。

さらに、グリーン・ツーリズムを推進するための資金調達をミュージックセキュリティーズ(株)と1,000万円の資金調達をクラウドファンディングで行った。その結果、1口3万円250人集まり、約9割は大田原の活動に興味を持った全国の方々で、グリーンツーリズムとしては初の試みであったことから、その投資家を集めて実施するツアー活動等が話題となりテレビで取り上げられ、大田原の知名度向上につながった。



観光名所の乏しい地域で農業を活用したグリーン・ツーリズムによる地域活性化と農業の発展を目指し、滞在型農業・農村生活体験、教育旅行の受入を持続的に発展させていくために、地域が一丸となって取り組む体制を整え、地域資源利活用に基づく事業展開で成果を挙げている点が評価される。廃校を活用し、運動会などのプログラムで企業の研修旅行や耕作放棄地での開墾体験を学習旅行のプログラムにするなどのアイデアも豊富。クラウドファンディングでの資金集め、SNSの活用なども、他地域の参考となる。

オーライ! ニッポン大賞 審査委員会長賞

一般社団法人 ゆ く ぼ じゅく 湯久保宿

ひの はらむら
(東京都檜原村)



■受賞の内容

JR武蔵五日市駅からバスで約1時間、さらにバス停から1時間歩いたところの山間に「湯久保宿」がある。御前山（標高1405m）の湯久保尾根の南斜面に位置している立地から、山で薪を拾い、山の木で家を建て、畑で作物を育て、漬け物や味噌などの保存食を作るといった昔ながらの暮らしが受け継がれてきた。

足立区生まれの湯久保宿代表の丸山氏は、約40年前に湯久保の古民家に家族と移り住んだ。

湯久保にある貴重な資源や伝統を最大限に活かし、「伝統的な暮らしの中に息づく日本の文化・風習を継承する」「人の対流によって、社会基盤としてのコミュニティの再構築を目指す」「日本の山の暮らしを取り戻す」ことを目的に協議会を立ち上げ、平成26年12月一般社団法人 湯久保宿を設立した。

築200年前後の古民家「かしゃくぼ（屋号）」を拠点に古民家の再生や伝統的な暮らしを受け継いでいくためのプログラムをワークショップ形式で行い、材料を地場の自然環境から調達し、地域に住まう人や職人と連携しながら、参加者と共に「モノづくり」「コトづくり」「バショづくり」を実践している。

ワークショップは、「衣・食・住・農」のコースで体験型研修を行っている。「衣」コースは、天然素材による染色と織物体験・現地で採れる染料の採取・育成方法・染色・織物工程を学ぶ。「食」コースは、食品の知恵とふるさと料理体験・郷土料理、味噌、自然酵母パンの作り方。「住」コースは、古民家の再生・職人技を通して実践的体験・製材・土壁塗り・茅葺き・和紙づくりなど。「農」コースは、畑の労作・風土適応体験・畑の管理方法・固



各地で過疎化が大きな課題となっているなかで、車が入れない山の生活道・沢水・山菜等を活用した体験型研修プログラムを設け、自然と共生する山の暮らしを提案し、実践的に学ぶことができる場所を提供。古民家を再生し、計画的な事業展開を行うことにより、幼児から高齢者までの世代を超えた人々が住む、新しい集落づくりに成功している。山村地域の再建モデルとなる。

■受賞者の概要

活動年数：前身団体7年、（一社）湯久保宿設立2年
活動日数：年間30日
活動を担う人数：20人（うち専属スタッフ7～10人）
参加者数：年間500～700人、累計1,000～1,400人

■写真の説明

- ・(写真上) 築200年前後の古民家「かしゃくぼ」
- ・(写真左下) バイオトイレの屋根を茅で葺くワークショップ
- ・(写真右下) 発酵食品の知恵とふるさと料理体験ワークショップ

有作物の栽培方法である。

古民家再生では、微生物の力を利用して尿尿(しにょう)を処理するバイオトイレも作った。床となる土間たたきは、土に、石灰、水、苦汁を混ぜ合わせて、丸棒で叩いて固める原始的な作業。トイレ本体の竹小舞下地作りは、提灯のように型枠に小舞を編み込み、最後に型枠を抜いて作る。

その他、自生している「楮」を原料に和紙づくり、守り続けてきた「地大豆」の生活食保存の知恵の継承。

サル、シカ、イノシシに荒らされていく「生活の道」をフットパスの考え方を取り入れて、歩く楽しさが味わえるような花木や香草などを植え、香りや景観を楽しみながら散策ができるルート開発などを実施した。

湯久保集落で生活する約20世帯のうち、1ターン世帯が66%となり、中でも30代の子育て世代が2世帯となっている。平成29年春には3世帯となる。この地に伝わる300年の歴史を持つ獅子舞の文化に若者たちは魅せられるなど地域の文化の担い手としても期待されている。移住したい都市生活者の家族がワークショップ、イベントの回を重ねるごとに増えており交流人口は、年700～800人に上っている。

すでに、湯久保集落には20代、30代40代の次世代が移り住み、乳幼児、学童、お年寄りたちが一緒に野山をかけ、畑の仕事などを楽しんでいる。古民家再生や一般市民参加による低コスト改修等、山村地域再生のモデルとして大いに期待される。

オーライ! ニッポン大賞 審査委員会長賞

株式会社 Ridilover

(東京都文京区)



■受賞の内容

「リディラバ (ridilover)」の語源は、ridiculous things loverの略から作られた造語であり、馬鹿らしいことが好きな人という意味。「社会の無関心を打破する」を理念に掲げ、社会問題・課題の当事者以外の人々の関心の喚起と解決への仕組みづくりを目指し、社会問題・課題の現場を訪れるスタディツアーや教育旅行等を企画し年間1,500人が利用。

リディラバでは、社会問題・課題の現場を訪れ、参加者が楽しみながら社会問題・課題について学ぶことができる旅行商品をスタディツアーと呼び、B to C、B to Bを問わず提供している。ツアー参加費の7割は、現地の受け入れNPOや関係者に支払い、継続的な活動費用に充ててもらっている。

都市農村交流においては、地方ならではの魅力、課題解決への取り組み、地方での働き方と新しいライフスタイルの提案など、参加者へ現場訪問を通して提供し、多くの移住・定住がなされるよう推進している。各地域の課題を旅行コンテンツにしてしまう独自性の高い取り組みは、社会課題のテーマに限定せず、日本全国多種類の現場へと適用できるビジネスモデルといえる。

各地域の農村漁村の魅力を感じていただくツアーの例として、山形県戸沢村「トレッキングや農作業体験のツ



■受賞者の概要

活動年数：3年 前身の活動年数4年

活動日数：年間365日

活動を担う人数：ボランティア600人（うち専属スタッフ9人）

年間参加者数：年間1,500人 累計4,000人

■写真の説明

- ・(写真上) 長野県高橋助作酒蔵様前
- ・(写真左下) 長野県上水内郡信濃町で野菜収穫
- ・(写真右下) 広島県府中市で木工制作

アー」、長野県上水内郡信濃町「野菜の収穫・販売体験ツアー」。地方の課題解決の現場を訪れるツアーとして、東京都西多摩郡檜原村や奈良県山辺郡山添村「耕作放棄地の整備と再利用に取り組む現場を訪れるツアー」、山梨県富士吉田市「鹿、猪の獣害対策の現場を訪れその対処法としてのジビエ食を味わうツアー」、富山県立山町「和紙の加工の体験を通して伝統工芸の継承を考えるツアー」などを実施した。

さらに、地方への移住定住を促進するツアーを通して、訪問先の暮らしについて理解を深めるだけでなく、その地域に対して、課題解決を通じた主体的な関わり方のできる人材になるようなプログラムを組んでいる。広島県府中市「移住者によってリノベーションされた古民家を訪れ、地域の伝統的なものづくりを体験するツアー」、鹿児島県長島町「地方で複数の収入源を持つ働き方を体験するツアー」、長野県信濃町「大自然の中で自分の仕事をする体験と伝統文化を通して地域への理解を深めるツアー」なども実施。

200種類以上のツアーを企画・実施し、参加者は4,000名を越える。学校向けスタディツアーや教育旅行開発プログラムの提供、企業研修などのプログラムも実施している。



地方の課題や社会の課題を楽しみながら実体験するスタディツアー（学びの旅行）を地域とともに開発。若者を中心に多くの人に参加してもらい、それらの問題意識を自分の事として、次のアクションに繋げるきっかけを作る！という取り組みを各地で展開。課題解決を主体的に関われる人材育成を図るプログラムなど様々な分野に応用できるその哲学と仕組みは、素晴らしいと高く評価された。今後のさらなる発展が期待される。

オーライ! ニッポン大賞 審査委員会長賞

特定非営利活動法人 棚田LOVER's

(兵庫県市川町)



■受賞者の概要

活動年数：6年 前身の活動年数10年

活動日数：年間310日

活動を担う人数：会員185人、応援団111人うち専属スタッフ2人

売上実績：約135万5,000円/年 累計 約418万9,200円

参加者数：2万人/年 累計 13万6,000人

■写真の説明

- ・(写真上) 市川町の棚田
- ・(写真左下) 田植えの様子
- ・(写真右下) たんぼアート

■受賞の内容

棚田LOVER'sは、「美しい棚田を将来につなげたい！」という想いのもと、生物・農・食の大切さの継承や棚田の保全を目的として10年間取り組んでいる。平成19年5月には学生や若者を含む市民に対して、農村地域や棚田での農作業体験・援農活動や多面的機能の普及啓発に関する事業を行い、学生と地域、都市と農山村の人々が相互に理解し協力し合える関係を作りあげ、持続可能な循環型社会の創出に寄与することを目的として学生と立ち上げた。

兵庫県香美町、市川町の棚田での農作業体験(200回以上)は、お米を育てる過程を知り、生き物と触れ合い、いのちやお米の大切さを伝え、農家の苦労や収穫の喜び、自然への感謝、棚田のすばらしさを体感し、ふるさとへの愛着心を育む機会となっている。また、棚田米のブランド化で付加価値を高めるために「笹ひめ・希」と名前を付け、水車での精米も行っている。

平成24年4月から市川町と連携し、貸し農園の開園も行う。地域活性化活動を行うほか、生物多様性や環境、農業への理解を深め、棚田保全活動の実践及び教育・指導を行える担い手増加システムである「棚田エコ学園」を年間約20回実施。今までの参加者は100名を超え、卒業生は都市農村交流の場で活躍している。

代表の永菅氏が平成26年に棚田で結婚式を挙げて移住し



た。これを機に多くの人の都市農村交流や移住促進をするために、地域の廃校や温泉を活用した婚活イベントを開催。平成27年4月11日の参加者は、男性20名、女性16名で6カップル誕生（そのうち1組は結婚）。11月8日は5カップル、平成28年11月26日は、3カップルが誕生（地元2組）している。

地元の自治会とも連携し、体験活動や移住を進める居住支援協議会を平成27年7月に立ち上げた。その他、大学の商店街での棚田米試食・販売会や兵庫県立大学と連携して、自然環境や食をPRする酒米作りも行い、商店街でのイベントは毎月3回（累計110回以上）。また、空き家情報も収集し、平成24年3月都市から約10名が移住し、支援も行っている。移住者の中には古民家カフェを開業する方も出ている。

平成21年3月からは、参加者同士で意見交換しながら、楽しみ、学ぶ「農楽カフェ」を神戸市や大阪府のカフェなどで開始、100回以上約900名が参加。より農業に関心ある方に向けて、姫路市等で有機農業講座を平成21年5月から開始、50回以上、述べ約700名が参加。また、企業との連携も進め、展示場で平成27年から餅つきを実施し、都市生活者が自然豊かな農村での農作業体験を通じて、多くの人々が都市と農村の往来を楽しめるように若者や農家などの多数の仲間とともに推進している。



大学生等と一緒に、若いリーダーが棚田の環境保全に取り組む活動を通じて、自然や農業への感謝の気持ちや農家とのふれあいや生き物とのふれあいの機会を提供し、都市と農村の往来を楽しむ仲間が増えていく。楽しみながら自然や農業を体験する企画力・実行力が優れ今後のさらなる発展が期待される。

オーライ!ニッポン ライフスタイル賞

NPO白神山地を守る会・NPO白神自然学校一ツ森校両代表理事 ^{ながい}永井 ^{かつと}雄人 ^{あおもりし}さん (65才) (青森県青森市)



■受賞者と農山漁村との関わり

【二地域居住】(15年)

仙台市と青森県鱒ヶ沢町を往来する二地域居住から、現在は青森市から鱒ヶ沢町に通う二地域居住を実践。

【地域での実践活動】(15年)

■写真の説明

- ・(写真上) ボランティアの学生と地元のお母さんと永井さん。
- ・(写真左下) 地区の婦人部と、学生との交流会
- ・(写真右下) 韓国全土の学生を受け入れて自然学校で写真

■受賞の内容

永井さんは、現役時代から山が好きで白神山地を初め青森県内の山を登山していた。白神山地が世界遺産になった当時、鱒ヶ沢町には、ミニ白神(現白神の森遊山道)という里の近場のブナ林を整備した登山コースがあり、そのガイドの養成講座講師を一年間努めた後、町長から廃校活用の依頼を受けた。

グリーン・ツーリズムの里として白神自然学校を提案し、廃校となった小学校を自然体験や白神の歴史を伝える「白神自然学校一ツ森校」として開校。

自然学校は、一ツ森地区の人達との連携が不可欠であり、町会長と話し合い、集会へも参加。さらに一緒に事業展開する地区員が出ると地元のシルバーと若者のガイドの養成研修会を実施した。

また、津軽森林管理署と「遊々の森」を締結し、林業体験の受け入れ基地の整備をはじめ、過去に伐採された森への植林を進める為、種苗免許を青森県に申請。ブナの種・ミズナラ・イタヤカエデ等の広葉樹の種を山から拾い、苗木を生産して植林するための休耕地の活用やコンテナ苗作りなどを(独)森林総合研究所と共同研究を7年間続けて技術習得に成功した。

また、首都圏から訪れる子供たちの受け入れ先として農家民宿(現在9件)を育成するとともに、廃校舎の一部を農家レストラン及び宿泊施設として改装し、利用するなど、同校を中心とした都市農村交流を実践している。グリーンシーズンは、ほぼ自然学校に泊まり込みの二極生活が続いている。

首都圏から白神山地に来た人々は、ブナ林で癒しを求め、開口一番「空気が美味しい。ブナの香りが良い」と言う。続いて、お米が美味しい、地元のお母さん達の漬物が美味しいと言う。農家の女性達のもっと働きたいという願いを叶えるために、3年間かけて漬物づくりに取組み「杓人のまんま本」という伝統料理と山菜料理とレシピをまとめた冊子を発行、農家レストランでも提供している。同じく、3年前からは、白神山地から採取されるオオバクロモジから精油を抽出し、白神アロマとして販売を始め、地域の活性化を望む人達と、地域資源を活用して、この地のできる事から対価を得る活動を一緒に実施している。

白神自然学校は、自然保護活動や学校のスタッフとして参加する学生が海外からボランティアで来ている。韓国政府との連携により韓国農大生の受け入れや、お米農家の人達や大学の教師達の受け入れ、地元の農家民宿への宿泊、町内会との交流とすっかり国際的になった。特産品の白神アロマは、星野リゾートにも販売が実現し大手百貨店とも商談が進んでいる。雪が降る半年間のオフシーズンは、来訪者も仕事も極端に少なくなるが、地域資源を活かした産業をすることで、定住・移住も含めて1年間安定した暮らしができる。今年の冬からは、インターチェンジ等の街路樹として植えられている樹木「ドイツトウヒ」の剪定で落とされた枝葉を精油用として蒸留する事業を冬期間行うことに挑戦する。夢は、「白神山地の豊かな水」を生かしたスキームをどう作るか。成熟した生活環境と雇用が結びつき、暮らして良し、訪れて良しの理想郷をどう創っていくのが夢であり、目標である。



ガイド養成講座の講師になったことをきっかけに、自然学校という拠点を得てからの地道な基盤づくりと計画的な事業展開を15年にわたり続け、彼が推奨する「ホリデー田舎暮らし」は、ワーク・ライフ・バランスが重視される時代に適合していると高く評価された。

オーライ!ニッポン ライフスタイル賞

豆腐クリエイター ^{さかもと}坂本 ^{しんじ}慎治さん (38才) ^{かなこ}香奈子さん (33才) (新潟県小千谷市)



■受賞者と農山漁村との関わり

【農山漁村への移住】(4年)

【地域での実践活動】(2年)

地域おこし協力隊で当地に入り、閉店した豆腐店を引き継ぎ豆腐づくりから販売まで妻と一緒に活動。

【地域での実践活動】(15年)

■写真の説明

- ・(写真上) 真人とうふ小千谷店(2号店)と坂本一家
- ・(写真左下) 豆腐クリエイター坂本さんと販売商品
- ・(写真右下) 真人とうふ真人店

■受賞の内容

坂本さんご夫婦は、真人地区の一軒家を借りて1歳の子供と3人で暮らし、慎治さんは、毎朝4時から約200丁の豆腐を作り、販売と配達を行っている。原料となる大豆は、小千谷市内の農家に依頼して数品種の大豆を毎年栽培してもらっているため、使用大豆の大半は市内産。不足する分のみ新潟県産大豆を使用している。香奈子さんは、平成28年8月にオープンした「真人とうふ2号店」で、菓子の製造補助と豆腐・揚げ物・菓子の店頭販売を子育てしつつ行っている。菓子も原料にこだわり、魚沼産の大豆を使い、現在は「豆乳プリン」「おからブラウニー」「おからマフィン」「豆乳ロールケーキ」を販売し、若い女性を中心に好評である。市内に2店舗を構えるなど取組が広がっている。

平成25年7月、小千谷市地域おこし協力隊に着任した坂本さんは、中山間地域で豪雪地帯の真人(まっと)地区へ配属された。その後、地域内や市内の人を訪問して話を聞き、今後の活動に生かせるように人脈を広げていた。その時、小千谷商工会議所の食で町おこしするための新商品開発を行う企画で、転作大豆を使った「大豆コーヒー」という商品を開発してメディアに取り上げられ、市内の物産店で販売されることになった。

翌年、同年代の農家さんの快諾により、都市部から稲作

体験を募集した。「半農半X」を参考に著者の承諾を得て都市部からの参加者と共に「1000本プロジェクト」を開催し、約25名の参加者が田植えや草刈り、稲刈りを体験し、自分たちが作った新米を食した。

「1000本プロジェクト」が終わろうとしている頃、担当地区の豆腐屋が年内(平成26年)で閉店するという噂を聞き、「このままでよいのだろうか、これはチャンスかもしれない」と考え、まずは、協力隊同期の香奈子さんに、いずれ自分たちで生計を立てないとこの地には定住できない、手に職をつけることは必要であり、地域協力隊として今できる最高の地域貢献でもあり、豆腐屋を継ぎたいと相談した。その後、豆腐職人の指導の下、豆腐づくり体験をし、製造工程を覚えながら豆腐屋を継ぐ決意が固まり、協力隊の受入団体長に相談した。市役所、受入団体、豆腐屋運営組合、坂本氏の4者で会議をし、円満に継業が正式決定した。豆腐製造体験から約2週間後の平成26年10月下旬から12月末まで、毎朝2時から6時まで豆腐製造の助手を行い、7時からは顧客への配達業務に従事した。平成27年1月1日から坂本氏を含む4名の新組合員での運営となり、豆腐の製造販売を行っている。同年3月31日に協力隊を卒業し、4月1日からは組合長として豆腐屋を受け継いでいる。



地域おこし協力隊に応募した若い男女二人が新潟県小千谷市で出会い、社会貢献につながる地域再生を目指す仕事に携わる中で結ばれ、閉店することになった地域特産の豆腐製造技術と販売店の継承。こだわりの豆腐づくり、販売に取組み、地域に定住するに至ったライフスタイルは、地域の人々にとって喜びであると同時に、これからの一つのモデルとなり得るライフスタイルであると高く評価された。

オーライ!ニッポン ライフスタイル賞

(株)土佐龍馬の里 代表取締役 ^{かぎ やま} 鍵山 ^{たけ お} 武男 さん (75才) (高知県香美市)



■受賞者と農山漁村との関わり

【二地域居住】(3年)

東京文京区と高知県香美市を行き来する二地域居住を実践。月のうち、7割は高知県。

【地域での実践活動】(3年)

両親の郷里の家屋敷畑等を相続し親戚、友人等と農業法人を設立。高知県の農産物を首都圏に販売や加工食品を製造販売している。

■写真の説明

- ・(写真上) 鍵山武男さん
- ・(写真左下) 高知で皆が自由に集まり飲食をする。ひろめ市場の芋バル、鳥谷店長と
- ・(写真右下) 青ネギハウスで社員と

■受賞の内容

鍵山さんは、大学卒業後、大手物流会社に定年まで勤め、物流業界団体の役員等を歴任。(株)国際物流研究所を設立、各種コンサルタント事業、並びに学習塾「関塾小石川校」を経営していた。

4年前、両親の郷である香美市土佐山田町の家屋・畑等を遺産相続し、親戚と友人5人で農業法人「株式会社 土佐龍馬の里」を設立(平成26年5月)した。

高知の農産物を東京へ販売するとともに、ニンニク加工品を製造販売。郷里の高知と東京を往来しながら、軸足を郷里に置き、地域の発展と日本にとって必要な一次産業の基盤を充実させたいと願い、その一助になる活動を実施している。

平成27年から国の農の雇用事業を申請して、社員2名を雇用。自社の畑で青ネギを主に栽培、年4回程度カットして食材として販売している。更に高知県は首都圏への販売コストが高くなる点等に着眼し、物流関係に工夫を凝らしながら、生産者と買手の間にたち、物流の経験とノウハウを生かしながら関係者にウィンウィンの状況を提供できるような仕組みの構築に取り組んでいる。

社員は2名。東京都内で共に高知県の農業研修を受けていた埼玉県出身の27歳のIターン者(現在、母親も高知県に移住)と地元の農家のお孫さん。

また、自分の社会経験と物流のノウハウを生かして近隣の若者の農業従事者とも交流を深めながら、地域の農業生産・流通・販売と一緒に取り組み始めている。

月に一回程度、妻と子供の住む東京都文京区へ戻り、首都圏の販売先の訪問も行っている。

平成28年には、「焼き肉のたれ」と自社で栽培している「青ネギ」をふんだんに使用して、知人の「宇佐のいわし」を合わせた「焼きそば」を商品化を目指し、コラボグランプリに参戦し入賞した。今後は、食に関するイベントが多い高知県で、販売しながら、さらに磨きをかけて本格的に商品化、パッケージ化に取り組む計画である。

高知県下の農産物の販売促進に関しては、各地の生産者25社程の生産物(生姜、ニラ、トマト、ナス、キュウリ、ミョウガ等々と果物、文旦、温州ミカン、ポンカン等)を首都圏に販売しているが、今までの物流・流通のノウハウから、長野県のきのこの生産者の流通の仕組みと手を組んで行っている。

高知県と長野県は季節的に生産物が競合しないことから、相互に協かし易く、長野県の農産物も高知県で販売することで、往復の物流を活用することができるメリットがある。高知県の食を海外に輸出し、国が進めるCCRC(大都市圏の高齢者が自らの希望に応じて地方に移り住み、地域社会において健康でアクティブな生活を送るとともに、医療介護が必要な時には継続的なケアを受けることができるような地域づくりを目指すもの)なども進めている。



遺産相続の畑を活用し、仲間5人と農業法人を設立、首都圏で販路を開拓している。団塊の世代が郷里の田畑を相続し、第2の人生を思い切って社会の課題と向き合って活動している。あと25年は現役として高知県を世界一楽しい、住みやすい地域にしたいと考えており、「健康寿命100歳時代」の模範と言えるライフスタイルが高く評価された。

第14回オーライ！ニッポン大賞の概要

●趣 旨

都市と農山漁村の共生・対流に関する活動を行いながら、交流の拡大や地域活性化に寄与した団体・個人、及び都市と農山漁村双方の生活や文化を楽しむライフスタイルを実践している個人を表彰し、その活動を広くPRすることで農山漁村を舞台とした新たなライフスタイルの普及推進を図ることを目的としています。

●表彰対象・審査基準

オーライ！ニッポン大賞

「都市側から人を送り出す活動」、「都市と農山漁村を結びつける活動」、「農山漁村の魅力を活かした受入側の活動」等を通じて、都市と農山漁村の共生・対流の拡大に寄与した実績や効果の高い団体又は個人。

(1) 募集の対象

- ・学生・若者カツヤク部門 主に30代までの若者の活躍により推進されている活動
- ・都市のチカラ部門 主に都市側からの働きかけによって推進されている活動
- ・農山漁村イキイキ部門 主に農山漁村側からの働きかけによって推進されている活動

(2) 表彰の種類

オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）1件

※オーライ！ニッポン大賞と、連携表彰事業から推薦される「オーライ！ニッポン フレンドシップ大賞」の中から1件が選ばれます。

オーライ！ニッポン大賞 3件程度
審査委員長賞 5件程度

(3) 審査の基準

新規性	農山漁村地域を舞台とした新たなライフスタイルの提案、普及に関する取り組みであること。
独自性	地域固有の資源や個性を活かした、オリジナリティ豊かな取り組みであること。
持続性	法人化や収益向上等により持続性の高い取り組みであること。
モデル性	他地域への応用や波及が期待できるモデル性の高い取り組みであること。
効果性	農山漁村地域を活性化する効果があり、今後も効果が持続して発現すると見込まれること。
社会性	地域の内外の多様な主体が参加連携し、地域の課題解決に取り組んでいること。

オーライ！ニッポン ライフスタイル賞

UJターンにより都市から移住する等して農山漁村で魅力的かつ新たなライフスタイルを実践し、都市と農山漁村の共生・対流に貢献している個人。

(1) 表彰の種類

ライフスタイル賞 3件程度

(2) 審査の基準

新規性	農山漁村を舞台とした新たなライフスタイルを実践していること。
独自性	個性的で魅力のある活動であること。
継続性	新たなライフスタイルの実践に継続性があること。
モデル性	新たなライフスタイルが他の人の参考となるものであること

第14回オーライ！ニッポン大賞審査委員会の構成

会長	安田 喜憲	ふじのくに地球環境史ミュージアム館長（オーライ！ニッポン会議副代表）
	井上 和衛	明治大学名誉教授
	岡島 成行	学校法人青森山田学園理事長、公益社団法人日本環境教育フォーラム副会長
	志村 格	一般社団法人日本旅行業協会理事長
	長岡 杏子	TBSテレビアナウンサー
	平野 啓子	語り部、かたりすと、大阪芸術大学放送学科教授（オーライ！ニッポン会議副代表）
	元石 一雄	NPO法人水と緑の環境フォーラム常務理事



主催：オーライ！ニッポン会議(都市と農山漁村の共生・対流推進会議)、農林水産省

協賛：一般財団法人都市農山漁村交流活性化機構

後援：総務省、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、国土交通省、環境省、
一般社団法人日本経済団体連合会、全国知事会、全国市長会、全国町村会

オーライ！ニッポン大賞 事務局

〒101-0042 東京都千代田区神田東松下町45番地 神田金子ビル5階

TEL 03-4335-1985 FAX 03-5256-5211 ホームページ <http://www.kouryu.or.jp/ohrai/> E-mail ohrai@kouryu.or.jp

「オーライ！ニッポン会議」の事務局を構成する21団体

(一財) 地域活性化センター	(公社) 全日本郷土芸能協会	(一財) 日本青年館	(公財) 日本修学旅行協会
(公財) 全国修学旅行研究協会	(公財) 育てる会	(公財) パブリックヘルスリサーチセンター	(公社) 日本青年会議所
日本商工会議所	全国商工会連合会	(一財) 伝統的工芸品産業振興協会	(公社) 日本観光振興協会
(一財) 地域開発研究所	(公財) 日本離島センター	(公財) 都市計画協会	(公社) 日本環境教育フォーラム
(一財) 農村開発企画委員会	全国水土里ネット(全国土地改良事業団体連合会)	全国森林組合連合会	(一財) 漁港漁場漁村総合研究所
(一財) 都市農山漁村交流活性化機構			